本在外研究では，組織情報倫理学研究の一環として，「サイボーグ倫理：人間の機械化に関する異文化間比較研究」をテーマに，非医療目的の身体装着型ならびに体内埋込型デジタル機器（サイボーグ機器）の開発と利用や，個人ならびに組織の情報活動および知的活動の人工知能（AI：Artificial Intelligence）システムへのアウトソーシングなどに関わる倫理問題・社会問題について，関連する組織と個人が果たすべき責任を視野に入れつつ，そうした問題の特質を解明し，必要とされる対応策をプロアクティブに提言することを目的に，主として英国とスペインの研究者との国際共同研究を実施した。

在外研究開始日から 2024 年 1 月 4 日までは，英国レスター市のデュモンフォート大学コンピューティング・工学・メディア学部（Faculty of Computing, Engineering and Media, De Montfort University）に名誉教授として招聘され，同学部に設置されている情報倫理の専門研究機関である「コンピューティングと社会責任研究所」（CCSR：Centre for Computing and Social Responsibility；https://www.dmu.ac.uk/research/centres-institutes/ccsr/index.aspx）を拠点に研究活動を行った。村田は 2003 年度と 2004 年度の 2 年間にわたり CCSR に客員研究員として在籍し，さらに 2005 年度以降は同研究所の国際リサーチアソシエイトを務めているため，CCSR の多くの研究メンバーとの有意義かつ具体的な研究業績のアウトプットを見据えた議論や学術交流をスムーズに行うことができた。とりわけキャサリン・フリック（Catherine Flick）博士（2023 年 11 月半ばに英国スタッフォードシャー大学に「倫理ならびにゲーム技術」担当教授として移籍）ならびにニール・マクブライド（Neil McBride）博士との議論を通じて，AI やサイボーグ機器を含む先端的な情報通信技術の開発と利用に関わる企業をはじめとする組織の責任体制のあり方について相互に理解を深めた。この議論の内容は，2023 年 7 月・8 月に国内で実施した「企業の倫理と社会責任に関する意識調査」と題するアンケート調査に基づく研究成果物（2024 年度に国内学会報告，国際会議報告および英文論文の投稿を計画中）に反映される予定である。

また，12 月 6 日に CCSR で開催されたワークショップ「AI and ChatGPT in public policy and decision making: Where are we? and where are we going?」に出席し，生成 AI システムや大規模言語モデルの開発と実装に対する規制について，英国の研究者や欧州連合（EU：European Union）のポリシーメイカーらと意見交換を行った。さらに，CCSR の創設者であるサイモン・ロジャーソン（Simon Rogerson）名誉教授と 12 月 15 日に面談し，情報倫理の問題意識を広く多くの人々と共有する手立てについて議論を交わした。その結果，論文や書籍，研究報告といったアカデミックなアウトプットだけではなく，詩や演劇，折句（acrostic）といった形での情報発信も有用ではないかという示唆を得られた。これは非常に興味深いものである一方で，研究の公表に関わる新たなノウハウの獲得を必要とするものであると同時に，研究者の評価のあり方にも関連することであり，今後の継続的な検討が必要である。村田は試みに，自身の 3 本の研究業績の内容を簡潔かつ直感的に紹介するための以下のような折句を作成した。

[1] Murata, K. (2024). Twenty eighty-four: From an Orwellian to a Kafkaesque dystopia. In Robinson, L. and Rogerson, S. (eds.), *The Handbook of Digital Social Science*, Edward

Elgar, forthcoming.

Don't avoid looking at reality.
Your autonomy and rights may be lost without your knowledge.
Serious social pathologies are quietly developing.
Tyranny is about to be perpetrated by technologies.
Overt surveillance and control are nowhere to be found.
Please take care.
Invaders are lurking in your laptops and mobiles.
Artificial intelligence systems should be governed properly.

Knowledge is available on the Internet.
Are you sure?
Fake data, photos and videos abound online.
Knowing the truth is increasingly difficult.
Artificial intelligence technologies are exacerbating this difficulty.

[2] Murata, K. et al. (2023). The ethics of body modification: Transhumanism in Japan. In Lennerfors T. T. and Murata, K. (eds.), *Ethics and Sustainability in Digital Cultures*, Routledge, 112-140. https://doi.org/10.4324/9781003367451-8.

Cybernetically controlled organisms have already been developable.
Your physical and intellectual capacities can be enhanced using wearable and implantable digital devices.
Body modification through the use of such devices could lead to digital eugenics.
Ordinary people may yet desire to use them.
Rules and restrictions on the use of those devices must be established appropriately.
Good human existence and a good society should be ensured.

[3] Murata, K. (2022). Post-truth: Organisational social responsibility in an AI-driven society. In Bounfour, A. (ed.), *Platforms and Artificial Intelligence: The Next Generation of Competences*, Springer, 269-281. https://doi.org/10.1007/978-3-030-90192-9_13.

Truths are no longer socially constructed.
Responsibility for such a situation is not taken by anyone.
Uncritically accepting artificial intelligence technologies seems unstoppable.
Technology is a means, not an end.
Human rights and dignity should be regained.

2024 年 1 月 5 日以降は，スペイン・マドリード市にあるコンプルテンセ大学マドリード経済経営学部（Facultad de Ciencias Económicas y Empresariales, Universidad Complutense de Madrid）の客員研究員として，20 年間以上にわたって研究協力関係を継続している同大学のマリオ・アリアス-オリバ（Mario Arias Oliva）教授との共同研究活動を行った。具体的な研究内容としては，組織情報倫理における「責任」概念と「倫理実践」の意味について議論を重ねた。また，上述の「企業の倫理と社会的責任に関する意識調査」をスペインのエンジニア，企業従業員，学生を対象として実施し，日本とスペインとの間での比較研究を行うことについても合意した。さらに，1 月 19 日には同大学の修士課程学生を対象に「How to study business and information ethics？」をテーマに講義を行い，3 月 1 日には学部学生に対して「Japanese employment: Culture, traditions and the future」と題する講義を実施した。

スペイン滞在期間中には，アリアス-オリバ教授の紹介で，同大学統計学部のラモン・アルベルト-カラスコ（Ramón Alberto Carrasco）教授と 2 月 15 日と 3 月 11 日に会合を行い，「生成 AI システムの倫理問題」について 2024 年 6 月から共同研究を実施することで合意した。その他にもレオン大学経営経済学部（Departamento de Dirección y Economía de la Empresa, Universidad de León；スペイン・レオン市）のパブロ・ゴンザレス-ロドリゲス（Pablo Gutiérrez Rodríguez）教授をはじめとして多くの研究者の紹介を受け，今後の共同研究の可能性を探ることができた。またゴンザレス-ロドリゲス教授からの要請に基づき，2 月 29 日にレオン大学経営経済学部で開催された研究セミナーにおいて以下の招待講演を実施した。講演内容についての活発な質疑応答が行われ，充実した時間を過ごすことができた。

Murata, K. (2025). How can we encourage business people to consider and behave ethically? Attitudes towards business ethics in Japan. Invited talk at Departamento de Dirección y Economía de la Empresa, Universidad de León.

旧知のファン・カルロス王大学ビジネス経済学部（Departamento de Economía de la Empresa, Universidad Rey Juan Carlos；スペイン・マドリード市）のカミロ・プラド-ロマン（Camilo Prado Román）教授とアリシア・キャンディダ-ブランコ-ゴンザレス（Alicia Cándida Blanco González）教授とは 3 月 4 日に面談し，引き続き共同研究を実施することを確認した。あわせて，プラド-ロマン教授が会長を務めているスペインを拠点とする欧州管理経営学会（AEDEM：La Academia Europea de Dirección y Economía de la Empresa；https://redaedem.org/）と村田が所長を務める明治大学ビジネス情報倫理研究所（CBIE：Centre for Business Information Ethics；https://www.isc.meiji.ac.jp/~ethicj/）との研究協力関係を維持することについても合意した。この 2 つの組織は，2019 年 6 月 5 日に第 33 回 AEDEM 年次総会（パブロ・デ・オラビデ大学（Universidad Pablo de Olavide），スペイン・セビージャ市）で村田が基調講演を行い，同年 9 月 3 日・4 日に CBIE がホストとして明治大学駿河台キャンパスを会場に第 28 回 AEDEM 国際会議を開催したこともあり，研究者交流を含めて良好な関係を維持し続けてきている。

2024 年 3 月 13 日～15 日には，ラ・リオハ大学経済経営学部（Departamento de Economía y Empresa, Universidad de La Rioja；スペイン・ログローニョ市）で開催された情報倫理の国際会議 ETHICOMP 2024（https://www.unirioja.es/ethicomp/2024/index.html）に出席した。本国際会議ではプログラムチェアを務め，全体のプログラムの取りまとめを行った。また，キーノートパネルディスカッション「Are we living in a “smart ethical” society?」のモデレータを務めるとともに，以下の 2 件の研究報告を行った。

Orito, Y., Yamamoto, T., Sai, H., Murata, K., Fukuta, Y., Isobe, T. and Hori, M. (2024). Is a brain machine interface useful for people with disabilities? Cases of spinal muscular atrophy. *Smart Ethics in the Digital World: Proceedings of the ETHICOMP 2024 21st International Conference on the Ethical and Social Impacts of ICT*, Universidad de La Rioja, 75-78.

Fukuta, Y., Murata, K. and Orito, Y. (2024). Privacy-related consumer decision-making. *Smart Ethics in the Digital World: Proceedings of the ETHICOMP 2024 21st International Conference on the Ethical and Social Impacts of ICT*, Universidad de La Rioja, 79-82.

その他に，多くの研究報告の質疑応答に参加し，自分自身の研究課題に対する理解を深めるとともに，情報倫理研究の最新の潮流に触れることができた。また，同国際会議の機会を利用して，これまで共同研究を継続的に行ってきているブルゴス大学組織工学部（Departamento de Ingeniería de Organización, Universidad de Burgos；スペイン・ブルゴス市）のアナ-マリア・ララ-パルマ（Ana María Lara Palma）教授ならびにラ・リオハ大学経済経営学部のホルヘ・ペリグリン-ボロンド（Jorge Pelegrín Borondo）教授と面談し，お互いの研究上の興味について共有を図るとともに，今後も共同研究を続けていくことについて確認した。

このように，約 5 か月間の海外滞在を通じて，英国とスペインの研究者との従来からの共同研究をさらに進展させることができ，また新たな人間関係を築いて，それを具体的な共同研究計画へと結びつけることができたため，大変有意義な在外研究となった。

在外研究期間中の望外の出来事としては，スペインの大学に所属する研究者との 20 年間以上にわたる共同研究の実績に対する評価に基づいて，スペインの非営利文化組織が選出する「Urban Beat 誌 2023 年医師と科学者トップ 15 人（Urban Beat 15 Mejores Médicos y Científicos 2023）」に選出され，1 月 26 日にマドリード市中心部にある重要文化財指定の建物である「シルクロ・デ・ベジャス・アルテス（Círculo de Bellas Artes）」において表彰されたことをあげることができる（https://urbanbeatcontenidos.es/kiyoshi-murata/）。大変名誉なことで，これまで共同研究に参加していただいたすべての方々に心から感謝申し上げたい。

また，在外研究の教育への還元活動の一環として，コンプルテンセ大学マドリードを会場に，合同セミナー「グローバルビジネスの展開（Doing Business Globally）」を 2 月 15 日・16 日の 2 日間にわたり実施した。この合同セミナーには，明治大学商学部村田ゼミナール所属の 7 名の学生（2 年生 5 名，3 年生 1 名，4 年生 1 名）が参加し，コンプルテンセ大学マドリード

の 9 名の学生と共に「日本とスペインの文化差異を念頭に置いた新規ビジネス提案書」をグループワークを通じて作成し，その内容に関してプレゼンテーションを行った。セミナーはすべて双方の学生にとって母国語ではない英語によって行われたにもかかわらず, 積極的に発言し, 議論をする学生の姿が見られ，成功裡のうちに幕を閉じた。この試みは，今後も継続して実施していく予定である。このセミナーの様子は YouTube のビデオで見ることができる（https://www.youtube.com/watch?v=LpXmKd2Kodc）。